

酒田湊御城米浦役人の寺島彦助

本間 勝喜

はじめに

寛文十二年（一六七二）に河村瑞賢により西廻り航路が刷新・整備されたうえ、酒田湊に御米置場（瑞賢倉）が設置されたことから、酒田には特に二名の御城米浦役人が置かれることになった。それより天保末年まで一七〇年余りに及んで常に浦役人二名がいることになった。今のところ歴任者として二十名ほど確認できる。¹

小稿では、右のうち元禄頃を中心に活動した寺島彦助について検討したものである。主として彦助が浦役人に就任した年代、出身地の鳴海との交渉・交流、浦役人としての活動等について述べている。

なお、平成十五年八月の山形県地域史研究協議会酒田大会（会場・東北公益文科大学）での拙報告「酒田湊の浦役人」の一部をまとめたものである。

一、浦役人に就任した寺島彦助

(一)

元禄頃の酒田に幕府御城米役人である浦役人を勤める寺島彦助という人物がいた。『奥の細道』紀行の途中、元禄二年（一六八九）六月に来酒した松尾芭蕉が彦助宅（安種亭）で俳諧興行を行ったことや、同人自身も俳諧をよくしたことなどから、寺島彦助は酒田の浦役人歴任者の中でもつても注目されてきた人物であるといえる。

寺島彦助について『酒田市史年表』²⁾（昭和六十三年十二月発行）では、元禄二年（一六八九）の芭蕉来酒に関した記事に続いて、

寺島彦助は俳号を安種・詮道・令道と号し、俳句をよくした。本町五丁目南側にすむ。貞享の初めごろより糸屋太右衛門（惣七郎）とともに酒田湊の浦役人となり幕府御米置場の管理等に当る。

と記し、本町五ノ丁に居住しており、安種等の俳号を持つて俳句をよくしたし、貞享年間（一六八四―八八）の初めごろに糸屋太右衛門とともに浦役人に就任したとする。『新編庄内人名辞典』³⁾（昭和六十一年十一月発行）でも、右よりやや詳しく次のように記している。

貞享の初めごろより糸屋太右衛門（惣七郎）とともに酒田湊の浦役人となり幕府米置場の管理に当る。元禄二年（一六八九）六月に俳聖芭蕉が、羽黒・鶴岡を経て酒田に来遊、不玉亭に泊つて翌十五日彦助宅安種亭で俳諧興行を行った折、「涼しさを海に入れたる最上川」の句（のちに「暑き日を海に入れたり最上川」と改作）を残した。不玉の撰に成る「継尾集」に安種亭、また松童窟蔵幅に酒田彦助の名がある。東海道鳴海の人とも伝えられ、「庄内人名辞書」

には「享保元年酒田小幡嘉兵衛とともに城米浦役人を命ぜらる」として、「享保五年の頃迄浦役人を勤め其後不明なり」と記述されている。

芭蕉が奥の細道紀行の中で詠んだ有名な句「暑き日を海に入れたり最上川」が寺島彦助宅で歌仙をまいたことが契機となつて生まれたこと、彦助自身も俳諧をよくし、彦助にいくつかの句が残されていること、そして貞享の初めごろより糸屋太右衛門（惣七郎）とともに浦役人に就任し、享保五年（二七二〇）頃まで勤めたことが記されている。なお、芭蕉が彦助宅で俳諧興行を行ったのは六月十五日ではなく六月十四日のことであつた。

右のように『酒田市史年表』、『新編庄内人名辞典』とも寺島彦助や糸屋太右衛門が浦役人に就任したのは貞享年間（二六八四―八八）の初め頃のこととする。

しかし、寺島彦助や糸屋太右衛門が浦役人に就任したのは貞享の初めよりも数年早かつたようである。まず、その点を検討しよう。

幕府の命をうけて、河村瑞賢が西廻り航路を刷新・整備したのであり、それに伴い寛文十二年（一六七二）より出羽幕領の年貢米（御城米）の江戸廻米を百姓直廻しとした。^⑥ それまでの江戸商人などによる請負廻米に代えて、幕府代官所等の指揮・監督のもと幕領村々の責任や負担増によつて江戸廻米するものであつた。

百姓直廻しの開始にあたり酒田湊に御米置場（瑞賢倉）が設置され、出羽幕領村々より最上川などによつて積下された御城米が一旦同所に保管され、廻船（海船）の到着を待つことになる。

御米置場や同所に保管された御城米を管理するとともに、御城米の廻米業務を世話や監視するために酒田には二名の浦役人が置かれたのである。

酒田で初めて浦役人に就任したのは二木九左衛門・二木与兵衛（庄兵衛）の兩人であつた。与兵衛は九左衛門の伴とも言われている。^⑦ 二木九左衛門は寛文十二年に酒田に來た河村瑞賢やその手代たちの宿舎を務めた船宿であつた。^⑧

ところが、「酒田湊御城米浦役人変遷の覚」によれば、延宝三年（一六七五）正月より後述のような理由で延宝五年（一六七七）秋頃までの三カ年ほどの間の期間に、

二木九左衛門後御役可相勤子息無之 四ノ丁 糸屋太右衛門

二木庄兵衛後役儀可相勤子息無之 五ノ丁 寺島彦助

というように浦役人が交代した。まず二木九左衛門が病身となったが庄兵衛（与兵衛）の外に後を継ぐべき男子がいなかったので、代つて本町四ノ丁に居住する糸屋太右衛門が浦役人に就任したのである。そして、二木庄兵衛も年数を置かず病身となったが後継の男子がいなかったため、代つて本町五ノ丁に居住する寺島彦助が浦役人に就任したとする。そのとおりとすれば、二木九左衛門・二木与兵衛（庄兵衛）に代わり、糸屋太右衛門・寺島彦助両人が浦役人に就任したのは延宝三年（一六七五）―同五、六年のことになる。貞享年間（二六八四―八八）の初めよりも六、七年以上も前に就任したことになる。

享保十年（一七二五）のものとみられる巳十一月付で書上げた酒田町年寄鑑屋惣左衛門・加賀屋円次郎・上林七郎左衛門三名の書付^①の一条に、

一、延宝六年午四月二十三日二木九左衛門跡役寺島伊左衛門申上候節之書付写別紙差上申候、其以後代り役之者拙者共吟味仕申上候

とあり、二木九左衛門が延宝六年（一六七八）四月に浦役人を辞任したので、三名の町年寄が人選を行い、後任に寺島伊左衛門を推薦したし、以後浦役人が交代する際には酒田町年寄たちが人選することが慣例となったとする。

しかし、先の「酒田湊御城米浦役人変遷の覚」の記述からみて、延宝六年四月に浦役人を辞したとされるのは二木九左衛門ではなく二木庄兵衛（与兵衛）の方であったとみられる。また庄兵衛の後任になる寺島伊左衛門は寺島彦助のことである。ただ、二木庄兵衛に代つて寺島彦助が浦役人となるのが延宝六年四月とする点であるが、四月は廻米業務が

もつとも繁忙となる時期とみられ、交代の時期としては適當ではない。庄兵衛が急病になったわけでもなく、後述のように庄兵衛の辞意は繁忙期を避けて前年五年秋のことと判断されるので、その点から遅くとも六年の二月か三月までには就任していたと考えられる。

(二)

前出『新編庄内人名辞典』の記述のように、寺島彦助は尾張国鳴海宿（現名古屋市緑区）の出身といわれている。その鳴海宿で千代倉屋という屋号で造酒屋を営んでいた下里勘兵衛（金右衛門）は俳号知足といい、鳴海六俳仙の筆頭にあげられ、芭蕉とも懇意であった。知足の日記「千代倉家日記」（「知足日記」とも）は様々な人達より知足に宛てた書状を反故紙として利用して書かれていた。^⑩ その「知足日記」の紙背文書の中に青山半右衛門という者が下里金右衛門（知足）に宛てた書状もあり、そこには寺島彦助（伊左衛門）が浦役人に就任したことについても言及されている個処もある。そこで青山半右衛門の書状のうち二点を紹介してみる。なお、青山半右衛門も鳴海宿に近い山崎村（名古屋南区）の出身であったが、同村の青山家は知足の姉の嫁ぎ先であるとともに、知足の弟である次右衛門が養子となっていたように、下里家の親族であったし、寺島彦助とも親族であった。^⑪ 青山半右衛門はその青山家の一族で当時出羽国漆山代官所（現山形市）付きの手代を勤めていた。^⑫

青山半右衛門の書状のうち、まず延宝六年（一六七八）のものとして推定される二月八日付の分を示そう。

（前略）貴様儀御隙御見合候而、湯殿山などへ御参詣可被成候、其節ハ御宿いたし可申候、寺島彦助殿内々願之儀、去秋埒明候而何も大慶仕候、委細は彦助殿より可申上候

一、貴様御舍弟御知恵付ノため一兩年も此辺筋へも御こし被成度由御尤二御座候、彦助殿とも相談可申候、書度事山々

候へども此便ニ御用共沢山ニ江戸□□候間、昼夜かゝり候故早々御免 恐惶謹言

二月八日

青山半右衛門

下里金右衛門御報

ここでは二箇所に寺島彦助のことが出てくる。初めに、寺島彦助が内々で出願していたことが昨年秋に叶えられたので大變めでたいと記しつつ、その件についての詳しい内容は彦助より直接知足の方にたよりがあるはずだとする。この内々の願いとは浦役人就任の件であつたことは、この書状が延宝六年のものであるとともに、後に示すもう一つの書状からも明らかとなる。ともかく、この書状から寺島彦助が浦役人を望んでいて、そのため内々の出願をしており、延宝五年秋に聞届けられたものであるが、ただ、この書状の日付の延宝六年二月八日の時点ではまだ正式に就任していなかったようである。就任は二月末か三月のことと思われる。ついで、この書状では知足の末弟（半三郎^③）が社会勉強のために一兩年も酒田の方に来たいとしていることに対し、青山半右衛門は賛成の意を表して、彦助とも相談したいとする。実際に半三郎が酒田に来たかどうかはあきらかでないが、おそらく実現しなかつたと思われる。青山半右衛門は漆山代官所の手代として支配地村々の年貢米を酒田湊より江戸廻米するのを指揮・監督するためにしばしば酒田にも出張して来たので、酒田在住の寺島彦助とも直接会つて談ずることも可能だつたのである。おそらく寺島彦助が浦役人就任に際して、漆山代官所手代の青山半右衛門の勧めや助言、町年寄等への働きかけなどがあつたものであろう。青山半右衛門の知足あてのもう一通の書状であるが、八月二十四日とあるばかりで年次が不明であるが文意からみて、やはり延宝六年（一六七八）のものとは判断される。

（前略）拙者も当春中酒田御城米船積ニ罷成、五月□最上へ罷帰、同晦日最上□立、江戸へ罷登り、御蔵詰仕罷有候、年々旁々へ罷越勝手共ニ致難儀候、何と□来月中ニ仕廻最上へ下度存ニ御座候：將□寺島伊左殿儀酒田ニ而御城□船積之時分、諸事肝煎□申候役人ニ当年より埒明□二日ニ五人ぶちづ、公儀より被□、数年伊左殿も願被申候□

(綴目のため数行欠)

御預り所壹万五千石新御口当年より被仰付、今程ハ五万口程之御代官所ニ被成、一〇致満足候(後略)

青山半右衛門がこの年漆山代官所付き村々の江戸廻米の指揮・監督のために初め酒田に出張したうえ五月に一旦漆山に帰ったが、五月晦日に江戸に登り、幕府米蔵への御城米納入を指揮・監督していたが、この年は御蔵納が遅れていて未だ完納しておらず、そのために何とか九月中には片付けて漆山に戻りたいとしている。つまり、この書状も江戸から出していたわけである。青山半右衛門が江戸廻米の仕事を通じて、当然酒田浦役人とも接触する立場にあつたことが確認できる。次に、漆山代官所の支配地がこの年一万五千石ほど増加し合わせて五万石ほどになったことが記されているが、これは延宝六年(一六七八)に、それまで二本松藩丹羽家の預地となつていた守山領(現福島県郡山市)約一万五千石が漆山代官所の支配地に移されたことを指している¹⁴。このことから、この書状が延宝六年八月二十四日付のものであつたことがわかる。

さらに、寺島伊左(伊左衛門)が酒田で御城米を廻船に船積する際に諸事を世話する役人に当年より就任して、幕府より五人扶持が与えられているとし、寺島伊左は数年ほどその役に就くために出願していたとする。ここでの役人とは酒田の御城米浦役人のことであるの言うまでもない。つまり、寺島伊左衛門が延宝六年(一六七八)より浦役人に就任したことが明らかである。そして、前に示した享保十年(一七二五)巳十一月と推定される酒田町年寄三人の書上げの記述に基本的な一致することになる。先に示した書状では寺島彦助とあつたが、両書状で延宝六年の浦役人就任の件は一致するのであり、そのうえ寺島彦助と二代彦助以外に寺島姓に浦役人になつた者はいなかつたこと¹⁵から、寺島伊左衛門とは寺島彦助であつたことは疑問の余地がないところである。そして、彦助は前年延宝五年秋には浦役人に内定していたのである。

寺島彦助が浦役人に就任したのは延宝六年(一六七八)であるのは間違いないとしても、四月二十三日とするのは少々

遅いように思われる。二月になると村山幕領村々では御城米の酒田への川下げが開始されるのであり、二月末頃からほとんど御米置場に御城米が搬入されることになる一方、海船（廻船）も四月頃から酒田に入湊するようになるはずである。¹⁶ 二木庄兵衛（与兵衛）が延宝六年にも浦役人を勤めるつもりでいたところ、急病のため突然浦役人を辞することになり、急遽寺島彦助に交代することになったという事情でもあればともかく、前出青山半右衛門の書状から知られるように、庄兵衛は前年秋までに浦役人を辞任することを願ひ出ていたはずである。寺島彦助の浦役人への正式就任は延宝六年の二月末か遅くとも三月中のことと考えるべきである。

ところで寺島彦助は何故浦役人に就任することを望んだのであろうか。浦役人の就任を望むほどであり、二木九左衛門と同様に彦助も船宿を営んでいたはずである。しかも酒田町の中心である本町五ノ丁に居住していたことを考慮すれば、単に船宿を営むばかりでなく廻船問屋であつたものであろう。事実二代彦助（三之助）の代のことになるが、享保四年（一七一九）三月の時点で寺島彦助は大問屋であつた。¹⁷ 大問屋は「下り荷物」として藍・綿を取扱う問屋であつた。¹⁸ まずは相当な商人であつたといえる。従つて、経済の面で、五人扶持（玄米九石弱）を得ることが一番の理由だつたとはいふににくい。

寺島彦助は後述するように、尾張国鳴海より酒田に来て居住するようになるのは寛文年間（一六六一―一七三）の初めの頃のことと推定される。やはり鳴海の寺島（西尾）家の出で寛永年間（一六二四―一四四）に酒田に來住した尾関又兵衛¹⁹はおそらく彦助の叔父か大叔父に当たると思われるのであり、彦助も尾関又兵衛らを頼つて酒田に居住し商売を始めたものであろう。二十歳代のことであらうか。彦助はその後何度か鳴海に行つており、鳴海紋など尾張の特産の綿織物を取扱つていたのではなからうか。

寺島彦助が浦役人への就任を望むのは酒田に居住して十年余り過ぎたとみられる延宝三年頃（一六七五）のことになる。十年余り過ぎたとはいえまだまだ新参の町人であつたことから、まだ世間の評価も高くなかつたので、幕府任命の

浦役人に就任すれば、五人扶持を与えられ苗字帯刀も許されるのであり、社会的評価も高まることが期待されたことから、親族の青山半右衛門の助言らもあつて出願したものではなかつたろうか。

二、寺島彦助と周辺の人々

(一)

寺島彦助に關しての最初の論稿と思われる故藤井康夫氏の「随筆寺島彦助」²⁰は、短文ながら長年にわたる寺島彦助追跡の成果をまとめられたものであるが、ここでは彦助について、

…安種は幕府差廻しの浦役人としての、いわば旅衆であつたにしても…

とか、その頃、鳴海の六俳仙のうち二人までもが寺島姓であり、それぞれ俳号を「安規」、「安宣」といったことなどから、別に、

想像するに彦助たまたま浦役人として鳴海か江戸に於て幕命を受け、貞享末か元禄元年かに酒田に赴任したものではなからうか。

というように記し、もともと鳴海か江戸などに在住する寺島彦助が幕府より浦役人に任命されて酒田に赴任してきたものと推測されている。

寺島彦助が尾張・鳴海の出身であることは間違いが、幕命を受けて浦役人として酒田に赴任したとする点は疑問がある。寛文十二年(一六七二)に河村瑞賢が酒田に二名の浦役人を置くことを上申した際も、「所之者式人程」²¹というように、

最初から酒田在住の町人より選ぶつもりであった。実際、寺島彦助以前に浦役人に就任した二木九左衛門、二木与兵衛（庄兵衛）、糸屋太右衛門の三人はいずれも酒田に住居し船宿や廻船問屋を営む町人であった。²²浦役人の後任の人選を委ねられていた酒田町年寄たちも当然酒田在住の町人より適任者を選んだはずである。寺島彦助も鳴海出身とはいえども、寛文年間（一六六一―一七三）の初め頃には酒田を本拠にして商売を行うようになっていたと思われ、それより十年余りした延宝五（一六七七）、六年頃には酒田在住の町人とみなされるようになっていたのであり、「所之者」として彦助自身が浦役人に就任することを望んで内願をするまでになっていたし、また酒田町年寄らも彦助を「所之者」と認めて二木庄兵衛（与兵衛）の後任として浦役人に推薦したものと考えられる。

さて、森川昭氏は「知足日記」から酒田在住の寺島彦助の周辺にいた者のうち寺島姓の人々として伊三郎、七郎右衛門、理平、伊左衛門の四人の名前があげている。²³そのうち伊左衛門は彦助の別名であることはすべに述べた。次に伊三郎について検討したい。

延宝七年（一六七九）の「知足日記」紙背文書に年次不明の二月二十三日付の寺島伊三郎・同理平連名の知足あて書状がある。

（前略）

一、七郎右衛門縁辺相調近々ニ祝言仕筈之由被仰下候、此方にて祝悦仕事ニハ、定もはや取逃可申と存候
一、御袋様弥々御堅固ニ被成御座候由是又満足仕候、可然様ニ御意得可被下候、伊三郎儀も来春ハ罷登可申と存候、此方相応之御用等御座候ば可被仰越候、猶期重慶之時候、恐惶謹言

二月二十三日

寺島伊三郎（花押）

同理平（花押）

下里金右衛門様

文中にある七郎右衛門は前述のように寺島姓であろう。近々祝言をする予定であるので、鳴海の方の人たちに伝えてほしいと頼んでいるのである。その点から七郎右衛門は若者であつたとみられ、伊三郎の弟であつた可能性があろう。知足の母親（永参尼）が健在であることが記されているが、同女は彦助の実家とみられる鳴海宿本陣寺島（西尾）伊右衛門の出であつた。²⁴彦助の叔母（伯母）であつたかと思われる。そして、伊三郎も来春には鳴海に行くつもりとして、何か注文の品などがあれば言ってくれるようにと述べていた。寺島伊三郎・同理平も知足の下里家と極く懇意であつたことがうかがえる。伊三郎と理平も極く近い関係にあつたはずである。

ところで、延宝八年（一六八〇）の「知足日記」紙背文書の延宝二年（一六七四）十一月二十五日付の江戸滞在中の青山半右衛門より知足あての書状に、

寺島伊三郎・孫左殿便りニ預貴札致拜見候

とあり、寺島伊三郎と孫左衛門という者の名前が出ている。文意は、知足より青山半右衛門あての書状を伊三郎・孫左衛門より受取つたということと思われる。伊三郎・孫左衛門の兩人もおそらく出府し、御城米の江戸御蔵納のために江戸滞在中の青山半右衛門に直接知足の書状を手渡したものであろう。

同じく延宝八年（一六八〇）の「知足日記」紙背文書の中に寺島伊左衛門（彦助）、成田孫左衛門連名により年次不明の十一月二十四日付の知足あて書状があるが、右の青山半右衛門書状に符合するような処が見受けられるようである。すなわち、

（前欠）暖氣ニ御座候間、満足仕候、無事ニ罷有候、庄内より心事可申上候、伊左衛門申上候、母義氣分いかゞ御座候哉と無心元奉存候、養生身持心持之義可然様ニ御異見被仰可被下候

一、江戸表物高値ニ御座候、尾張米壹両ニ七斗壹式升、江戸地廻米七斗八九升、坂東大豆九斗四五升より壹石迄、其外相場七郎右衛門方へ申遣候、関東何方も当作違ひ申、米大豆共ニ不足ニ御座候、当分ハ日々ニ少づゝ高直ニ罷成候、

来春とてもさがり申間敷との取ざた二御座候間内々左様ニ御心得可被成候、猶期後喜之時候、恐惶謹言

十一月二十四日

寺島伊左衛門（花押）

成田孫左衛門（花押）

下里勘兵衛様人々御中

とあり、まず寺島伊左衛門（彦助）の母親が少々健康を損っていたことから伊左衛門が心配しており、知足より意見してくれることを頼んでいた。またこの年尾張国や関東一円の凶作のため江戸などの米、大豆をはじめ物価が上昇していることが記されたとおり、それを寺島姓と思われる七郎右衛門に書状で伝えてやったとしていることからみて、伊左衛門と成田孫左衛門は江戸滞在中と推定されるし、七郎右衛門は酒田に居たと思われる。延宝頃には凶作がしばしば起っているが東海地方や関東全域の凶作であることからすれば延宝二年（一六七四）が考えられる。同年は全国的な凶作であった。同じ延宝八年の「知足日記」の紙背文書であり、青山半右衛門の書状が延宝二年のものとすれば、寺島伊左衛門・成田孫左衛門連名の書状延宝二年のものとみるのは自然である。

今、両書状が延宝二年のものとすれば、酒田在住であるとみられる寺島伊三郎・孫左（孫左衛門）と寺島伊左衛門（彦助）・成田孫左衛門の二組が同年十一月末頃に同時に江戸滞在中であったことになる。ところが、一方の孫左衛門は他方の成田孫左衛門のことであろう。そうすると寺島伊三郎と寺島伊左衛門（彦助）も同一人ということになる。つまり、寺島彦助、寺島伊左衛門、寺島伊三郎は同一人であったと判断される。青山半右衛門は支配地村々の御城米の江戸御蔵納のため長く江戸にあつて多忙であつたので、延宝二年中に寺島伊三郎が伊左衛門に改名したことを承知しておらず、知足への書状に伊三郎と記したことが考えられる。

(11)

寺島伊三郎が伊左衛門（彦助）のことで、延宝二年（一六七四）頃まで伊三郎と名乗っていたと推測しえる。例えば、延宝九年（一六八二）の「知足日記」紙背文書に寺島伊三郎より知足兄弟あて書状がある。年号が無いが無神月（十月）八日付である。

：然バ御親父様御遠行之由扱々驚入申候、何れも様御力落可申上様も無之次第二候、御袋様へも以前參可申上候へども乍慮外此内御心得可被下候：何様拙者も来春罷登り万々□上候、恐惶謹言

無神月八日

寺島伊三郎（花押）

下里勘兵衛様

同 次右衛門様

寛文七年（一六六七）八月に知足の父久宗が死去したので、それに対する寺島伊三郎の悔やみ状であり、同じ寛文七年十月八日付とみてよいであろう。また何としても来年（寛文八年）には伊三郎が鳴海の行くつもりであることが記されていた。事実、「知足日記」の寛文八年八月二十三日のところに、⁽²⁷⁾

伊三郎坂田へ行

と記されており、予告どおりに寺島伊三郎が寛文八年に鳴海に行き、何日か滞在し知足などとも面談したうえ、八月二十三日に坂田（酒田）に帰る途次についたのであった。なお、同日記では二日前の八月二十一日のところで、⁽²⁸⁾

坂田へ遣俳諧之卷仕ル

とあるので、知足は酒田へ帰る伊三郎に持たせるために「俳諧之卷」を仕上げたことが知られる。これらのことから、

寺島伊三郎（彦助）は寛文七年（一六六七）以前に酒田を本拠地として商売などを行っていたとみられる。前出の年欠の三月二十三日付の寺島伊三郎・同理平連名の書状でも「伊三郎儀も来春ハ罷登可申と存候」と記していたので、先の寛文八年（一六六八）以外にも伊三郎は鳴海に帰ったものとも思われるが、延宝二年（一六七四）までの「知足日記」には寛文八年以外に伊三郎の鳴海行きは記されていないのであり、あるいは都合で実現できなかったかとも思われる。

また延宝六年（一六七八）の「知足日記」紙背文書に寛文十二年閏六月二十四日付の寺島七郎右衛門・同伊三郎連名の知足あて書状がある。

御同性次右衛門殿去五月御死去之由承驚入奉存候、御力落之段可申様も無御座候、御袋様御愁傷之段令察候、遠路故御病中も不存知以書状も不申上候 恐惶謹言

閏六月二十四日

寺島七郎右衛門（花押）

同 伊 三 郎（花押）

五月に知足の弟次右衛門（青山家養子）が死去したので、それに対する悔やみ状であった。なお、寺島七郎右衛門が伊三郎（彦助）の弟の可能性がある。

鳴海宿の寺島伊右衛門家（本姓西尾）は同地の本陣を勤めていた³⁰。先代が四郎左衛門で、その後を長子伊右衛門（安規）が継ぎ、二子の嘉右衛門（安信）は分家し問屋（問屋場）を営んだ。伊右衛門は元文元年（一七三六）九月に九十一歳で死去したので正保二年（一六四五）の生まれであり、弟の嘉右衛門は享保七年（一七二二）十一月に死去したが享年は不明である。仮に伊三郎が寛文七年（一六六七）に二十歳とすれば、慶安元年（一六四八）生まれということになる。両人は同じ家に生まれたと思われる伊三郎（彦助）とほぼ同じ年代になるとみられるので、想像を逞しゅうすれば、伊三郎は四郎左衛門の三男で、伊右衛門、嘉右衛門の弟だったのではないかと推測される。

七郎右衛門の祝言の件を知足に知らせた寺島伊三郎・同理平連名の書状は前に示したが、天和三年（一六八三）の「知

足日記」紙背文書の寺島彦助の知足あて書状で寺島理平のことに言及している。森川昭氏は延宝七年（一六七九）のものかと推定されている。

（前欠）被成候由無御心元奉存候、夢々存不申以書状も不申進候、然共最早すぎと御平愈被成候由、兼而御行脚可被成段承申候故、当年御出被成候哉と心得仕候、無其儀残多奉存候、必来年ハ湯殿山御参詣ながら当国之名所袖浦・蚶潟御見物がてら此方へ御立寄奉待候、将又貴様御役儀五三年以前より御訴訟被成置候、大形埒明かゝり申候由、就夫跡役之事理平ニ御申立可被下候由扨々一段満足之儀ニ御座候、貴様御指上ゲ候ハ、理平儀首尾調申候様ニ弥奉願候、猶期後喜之時候、恐惶謹言

八月五日

寺島彦助

下里金右衛門様貴報

まず、知足が病氣になったことを知らず、直ぐに御見舞の書状を出せなかつたことを謝びている。そのうえで知足の出羽来遊を勧めている。そして、おそらく鳴海宿の問屋の役のことと推測されるが、それまで下里家（知足）が問屋を勤めていたものの数年前より辞任することを願ひ出ていて、ようやく許可される見通しとなったことから、後任に理平が就任することを望んで知足に推薦を頼んでものである。前述のように鳴海の寺島（西尾）家の分家である寺島嘉右衛門は問屋を勤めていた。問屋（問屋場）とは、東海道の宿駅である鳴海宿で人馬の継立てを行う事務所である。嘉右衛門がいつから問屋の役を務めたか明らかでないが、もし下里家の跡を引継いだものとすれば、寺島理平とは嘉右衛門のことである可能性が高い。³²⁾

寺島伊三郎（彦助）と連名で書状を知足に遣したように、寺島理平も一時酒田に滞在したことがあつたものである。理平が寺島嘉右衛門のこととすれば伊三郎（彦助）とは兄弟だった可能性があり、尾関又兵衛の支援で酒田で商売を始めた伊三郎（彦助）を応援するために理平（嘉右衛門）も酒田に滞在していたが、その後鳴海に戻って知足の後任とし

て問屋の役に就いたものと推測しておきたい。

寺島彦助は元禄二年（一六八九）にも鳴海に帰っていた。六月十四日に自宅に芭蕉を迎えて歌仙をまいたが、同日頃に江戸に登った。「曾良旅日記」の六月十九日のところに次のようにある。

明二十日、寺島彦助江戸へ被趣二因テ状認、翁より杉風、又鳴海寂照・越人へ被遣

彦助は出府に際し、芭蕉より寂照（知足）などあての書状を預っているのので、初めから江戸での用事が済むと東海道を登り鳴海に行くことを予定していたのであろう。「知足日記」の元禄二年七月十四日の条に「酒田彦助上る⁽³³⁾」とあり、同日に彦助が鳴海に到着したのであった。そして同じく八月二十五日の条に、⁽³⁴⁾

寺島彦助殿、伊右衛門殿、内方十人斗振廻

とあり、滞在中の寺島彦助と寺島（西尾）伊右衛門を招いて知足方で振廻があつたことが知られる。少なくとも、この間一ヵ月以上彦助はおそらく実家である寺島（西尾）伊右衛門家に滞在していたものとみられる。その際、藤井康夫氏が指摘したように八月十六日に伊勢長島（現三重県長島町）に赴き曾良と再会した可能性が⁽³⁵⁾ある。

寺島彦助家が享保四年（一七一九）に大問屋であつたように、早くから廻船問屋を営んでおり、鳴海特産の鳴海紋りなど尾張地方の綿織物などを主に取扱っていて、彦助の何度かの鳴海行きも親族に再会するだけでなく、商用を兼ねていたのではなからうか。「知足日記」の延宝三年（一六七五）十一月十四日の⁽³⁶⁾ところに、

彦助殿うけ取手がた参申候

と彦助より手形が送られてきたことを記しているのも、彦助の鳴海方面との取引の一端を示すものかと思われる。

三、浦役人としての寺島彦助

(一)

浦役人の役目について、『酒田市史 改訂版』²⁷では、「仕事の内容は、御城米海船積立諸事御用、御米置場の守護、御城米積み川船、海船入津出帆のさい御城代所・御郡代所・御町奉行所・御徒目付などへの御届方、難波船があつたときは御領分はもちろん下筋津輕領までもまかりこして御用をつとめるなどである」と記している。

右のことを踏えて、ここでは寺島彦助の名前が記されている史料数点を大体年代順に紹介して、浦役人として活動した足跡の一端を示してみよう。まず、貞享元年（一六八四）の御米置場番人の給金についての史料である。²⁸

酒田公義御米置場番人

一、金四両

作左衛門

是ハ子ノ霜月より丑ノ十月迄老年の給金山口三郎右衛門末書二而出ル

寺島彦助

証文

糸屋太右衛門

御米置場番人作左衛門の貞享元年十一月より翌二年十月まで一カ年の給金四両は、浦役人の寺島彦助・糸屋太右衛門両人の証文に酒田町奉行山口三郎左衛門の末書によつて支払われるものであつた。番人の給金は庄内藩より支給された。御米置場の維持・修理等は同藩が担当していたからであらう。しかし直接的には浦役人が監督する立場にあつたのである。定番人ということで作右衛門の子孫が長く番人を勤めたのであつた。²⁹『酒田市史年表』等で寺島彦助の浦役人就任

を貞享初め頃とするのはこの史料の存在によるものかと思われる。

貞享三年（一六八六）四月に丸岡領御城米を積んで酒田湊を出帆した海船が越後・出雲崎沖で事故を起こした。それについて庄内藩家老の同六月の書状に、⁴⁰

…丸岡御領當年江戸廻シ御城米千五百式十三俵積立候塩飽牛島源右衛門舟、越後於出雲崎沖ニ当五月三日ニ逢難風破損仕候由、則公義御代官設案孫兵衛殿下代浦部藤助と申者より右之通爰元伊藤多兵衛所へ申参候付、我等共御郡代衆へ遂相談、御代官伊藤多兵衛並手代佐藤仁右衛門・酒田御城米役人寺島彦助、此三人申渡、去十三日庄内発足、同十六日ニ出雲崎へ参着、右破損舟之様子承御座候処、海中より御米不残取揚ケ、設案孫兵衛殿下代浦部藤介と相談、入札を以濡米払之由、右之札金ハ孫兵衛殿より御勘定所へ差上筈之旨、太兵衛先月二十八日ニ爰元へ罷帰申聞候と、丸岡領御城米一五二三俵（二俵四斗八升入）を積んだ塩飽牛島（現香川県丸亀市）源右衛門船が出雲崎沖で五月三日、難風に遭い事故を起こしたもので、幕府・出雲崎代官の方より五月十日に飛脚が庄内に到着したため、⁴¹国元家老・郡代が相談した結果、丸岡領預地代官伊藤多兵衛、手代佐藤仁右衛門及び浦役人寺島彦助の三名が出雲崎に出張し事後処理などに当つたのであつた。すでに海中に沈んだ米俵はすべて引揚げられていたので、代官下代の者と相談し、同地で取上げた米を入札で売払い、代金を幕府勘定所に上納することにして同月二十八日に帰国したとする。寺島彦助は浦役人として事故の情況などを独自に調査したことであろう。また元禄二年（一六八九）のこととして、

浦役人寺島彦助・糸屋惣七郎御城米川下ケ運賃米扣ニ書加ヘ有之候を写⁴²

とあり、村山幕領村々よりの御城米川下げ賃に変更があつたものか、寺島彦助らが記した覚書があつたとする。

元禄九年（一六九六）に初代寺島彦助が浦役人を辞し、代つて伴の三之助が二代寺島彦助として浦役人に就任した。⁴³

同年の「酒田沖ノ口穀物改目録」⁴⁴に、

酒田御藏米沖出之覚

(前略)

七口穀物

合拾壹万五百四拾九俵壹合貳勺八才

内米八拾貳俵壹斗六合四勺七才、是ハ酒田御町人寺島彦助・糸屋惣七郎方へ買取、御城米船中糧米二度々ニ通シ申候証文十九枚：

とあり、庄内藩御蔵米の内酒田沖ノ口改番所を通過して沖出しされた米のうち八二俵一斗余が酒田町人の寺島彦助・糸屋惣七郎(太右衛門)が買取った分であつたが、「御城米船中糧米」というように御城米廻船の乗員たちの飯米として売付けられたのである。浦役人は船宿を兼ねており、御城米船の船頭たちの宿舎も勤めたので、自分の方に宿泊した船頭の廻船に、御蔵米を購入したうえで飯米として売渡したのである。

大坂佃屋の御城米船が御城米一六四九俵を積んで元禄十七年(一七〇四)五月十日に酒田湊を出帆し東廻りで江戸に向つたが、船日記には寺島彦助等の名前がある⁽⁴⁵⁾。

印判者 御城米酒田役人

寺島彦助

(糸) 鳥屋多左衛門
(右)

元禄十五年(一七〇二)二月に御米置場の御城米の出入れを担当する丁持の實銭が増額された。

覚⁽⁴⁶⁾

一、御城米持賃壹俵二付

大表^(俵)三文半

小表貳文半

右御城米持賃貞享年中ニ相定被下候、其以前者一日何ほと申日雇ニ而御米積入申候、其已後段々諸色高直ニ罷成困窮仕候故、實銭増願上候へハ早速御聞濟被成下候而、大小共ニ壹俵二付壹文ましニ被成下難有奉存候 以上

一、御城米背負下賃 ^(俵) 大表四文半

小表三文半

一、同御米積移賃 大表貳文貳分五厘、小表壹文七分五厘

右之通ニ御定被成下候、為後日之如此御座候 以上

元禄十五年午二月

御浦役 寺島彦助 殿

糸屋多右衛門 殿

以前の丁持は一日何文という日当で仕事をしていたが、貞享年間（一六八四―一六八八）に一俵が大俵三文半、小俵二文半という出来高弘制に移ったとする。ところが、その後次第に物価が上がり丁持の生活が苦しくなったので、増銭を願ひ出たところ許可されて大俵・小俵とも一文増になったことを文書にしたものであった。持賃の額を決めるのは浦役人の権限だったようである。

正徳五年（一七一五）に酒田湊より沖出された米・大豆・小豆らの合計は六万五千俵余であったが、これは「城米浦役人寺島彦助聞合」によるものであった。¹⁷⁾

寺島彦助の浦役人としての活動を示す史料は大体以上である。浦役人の役目の一部にすぎないが、史料が乏しく、全体的な役割や働きを明らかにしえない憾みがある。

(11)

元禄九年（一六九八）の「無役被仰付帳」に、

一、式軒屋敷 無役 本町 寺島 彦助

糸屋 惣七郎

是ハ御城米役人ニテ無役ニ御座候⁽⁴⁸⁾

とあり、浦役人は一軒屋敷分ずつ無役ということ町役が免除されていたのである。因に、同年の「本町屋敷割」⁽⁴⁹⁾には、
〇五ノ丁

一軒屋敷無役 三之助

とあるが、三之助は寺島彦助の伴であり、元禄九年中に父親の後を継ぎ浦役人に就任したのである。彦助は老齡などのため隠居したものか、あるいは病死したものか不明である。

初代寺島彦助の後を継いで、三之助改め二代寺島彦助は元禄九年（一六九六）より二十数年浦役人を勤めたが、病身のため享保五年（一七二〇）十一月までに浦役人の退役の願いをしたのである。⁽⁵⁰⁾「酒田湊御城米浦役人変遷の覚」には、

享保五年十一月寺島彦助病身ニ付御役儀御免、右後役富樫伊兵衛

と記されていたので、願い通りに十一月に浦役人を退任したのである。しかし、実子など後継者がいなかったとみられ、後任には富樫伊兵衛が就任したとする。ただ、別の史料には、翌享保六年（一七二一）三月のこととして、

一、御浦役寺島彦助殿役義被取上、其跡役ニハ富樫伊助殿ニ被仰付候：

とあり、彦助の後任には富樫伊助が就任したとする。宝暦五年（一七五五）十一月に当時の浦役人が浦役人歴任者の名

前を書上げた中にも、⁽⁵¹⁾

右寺島彦助代り富樫伊助

とし、富樫伊助の件を伊兵衛であると記しているの、寺島彦助の後任は富樫伊助が正しかったのである。もう一人の浦役人三代糸屋太右衛門の方も小幡（押判屋）嘉兵衛と交代した。「酒田湊御城米浦役人変遷の覚」には宝永五年（一七〇八）三月のこととし、

太右衛門儀病身ニ付御役儀御免奉願上、其後役ハ 押判屋嘉兵衛

と、太右衛門が病身になったので浦役人の辞任願いをして、その後任に押判屋（小幡）嘉兵衛が就任したとする。しかし、宝永六年十一月の東根米についての書付は浦役人の糸屋多右衛門・寺島彦助にあてられた⁽⁵²⁾ので、この時点でまだ浦役人に在職していたことになる。小幡嘉兵衛の浦役人就任は数年後の享保元年（一七一六）のこととみられるので、糸屋太右衛門の浦役人辞任は同年か前年のこととみるのが妥当である。

ともかく寺島彦助よりも糸屋太右衛門の方が一歩先に浦役人を辞任したのである。そのため、幕府出羽代官三名より問い質されたことに対して酒田御米置場の由来と浦役人勤方についての享保三年九月の答書「御尋ニ付申上候」⁽⁵³⁾は浦役人小幡嘉兵衛・寺島彦助の名前で差上げたのであった。

そして、二代目寺島彦助も二年後の享保五年十一月に浦役人を辞任したのである。

以後、寺島彦助の名前は歴史の表舞台から忽然と消えてしまい、同家のその後の消息は否として知れないのである。⁽⁵⁴⁾後を継ぐべき者がおらず家が絶えたものであろうか。

むすびに代えて

酒田の浦役人のうち寺島彦助をとりあげ、浦役人就任の年代、出身地鳴海とのつながり、浦役人としての活動等について述べたものである。

元禄二年（一六八九）に芭蕉が来酒した際に彦助宅で俳諧興行を催したことから、早くから注目されてきた人物である。しかし史料が乏しいこともあり彦助の人物像がなかなか鮮明になって来なかったといえる。それでも藤井康夫氏、佐藤七郎氏らの研究により彦助の顔がしだいにみえるようになってきたと思われる。

小稿でも右の両氏の研究に負うところが大きいのであるが、さらに森川昭氏の「知足日記」に接することができたことにより視野が大きく拡がることになったものと考えている。

それでも、史料不足などのため、推測にとどまった点もいくつかある。今後の課題としたい。

最後に、寺島彦助に関心を抱くようになったのは森川昭（東京大学名誉教授）・佐藤七郎（元本間美術館学芸員）にお会いしたことがキッカケであった。また田村寛三氏（元酒田市史編纂室長）より浦役人につき有益な御教示を頂きました。佐藤景子氏（光丘文庫）には史料調査で御世話になりました。末尾ながら記して四人の方々に感謝申し上げます。

註

〔1〕拙稿「酒田湊の浦役人」（『山形県地域史研究』第二十九号）

- (2) 『酒田市史年表』(改訂版) 一一五頁
- (3) 『新編庄内人名辞典』四七〇・四七一頁
- (4) 『曾良旅日記』(『新芭蕉講座』第八卷)
- (5) 田村寛三『酒田人名辞典』一一八頁に依るとみられる。
- (6) 『酒田市史』改訂版 上巻三六〇頁など
- (7) 『酒田湊御城米浦役人変遷の覚』(酒田市立光丘文庫伊東家文書、なお藤井康夫「随筆寺島彦助」への佐藤七郎氏の「付記」(酒田古文書同好会『方寸』第八号)
- (8) 『酒田市史史料篇』(四) 四四六頁、鶴岡市史編纂会『大泉紀年』下巻六九頁
- (9) 『承露盤』巻十七(『酒田市史史料篇』四)、なお山形県史資料編六『雞肋編』下巻では寺島伊左衛門ではなく 伊右衛門とある。なお、この条文についてはすでに佐藤七郎「付記」でも取上げている。
- (10) 「知足日記」紙背文書はすべて森川昭「おくのほそ道 暑き日を」の周辺(『方寸』第十号)による。
- (11) 寺島(西尾)、下里、青山三家の関係は平成六年八月六日、地域学遊大学酒田公開講座の森川昭氏のレジュメによる。
- (12) 拙稿「漆山代官所手代の青山半右衛門とその書翰―酒田・浦役人寺島彦助の周辺から―」(『方寸』第十号、のち拙著『近世前期羽州幕領支配の研究』第五章第一節に再録)
- (13) 森川昭氏のレジュメ
- (14) 『福島県史』一〇(上) 八〇・八〇九頁、平凡社『福島県の地名』四九七頁
- (15) 拙稿「酒田湊の浦役人」
- (16) 文政九年の場合、御城米の廻船への積入れの開始は四月三日頃であった(「御足輕目付御用帳」、『酒田市史史料篇』八)
- (17) 『酒田市史』(旧版) 上巻二七頁
- (18) 「問屋議定仕候ニ付願書外」(『酒田市史史料篇』三)
- (19) 『酒田市史史料篇』(三) 五六九頁、なお初代尾関又兵衛は尾張・鳴海寺島伊右衛門二男といわれる。
- (20) 『方寸』第一号、なお同誌八号に再録
- (21) 『大泉紀年』下巻一〇五頁
- (22) 糸屋太右衛門は元禄十四年十二月時に問屋であった(「従古来問屋向御用留書拔」、『酒田市史史料篇』四)
- (23) ・(24) 森川昭氏のレジュメ

- (25) 森川昭「千代倉家日記抄」一（『俳文藝』第三十二号）、すなわち「知足日記」のことである。
- (26) 森川昭「おくのほそ道『暑き日』の周辺」
- (27) ・（28）「千代倉家日記抄」一
- (29) 「千代倉家日記抄」一、及び同二（『俳文藝』第三十三号）
- (30) 『愛知県の地名』二二五頁
- (31) 佐藤七郎「付記」
- (32) 当時、鳴海に問屋二軒があった。嘉右衛門、源右衛門であるが（森川昭「おくのほそ道『暑き日』の周辺」）、源右衛門は兒玉姓であつたものか（『角川日本地名大辞典』二三）
- (33) ・（34）森川昭「おくのほそ道『暑き日』の周辺」
- (35) 藤井康夫「随筆寺島彦助」
- (36) 森川昭「千代倉家日記抄」二
- (37) 『酒田市史 改訂版』上巻三八四頁
- (38) 貞享元年四月「子之御取替御切米帳」（酒田市立光丘文庫）
- (39) 延享四年七月「御尋ニ付申上候」（『酒田市史史料篇』三）
- (40) 「疋田記」一（光丘文庫）
- (41) 鶴岡市史編纂会『鶴ヶ岡大庄屋川上記』上巻二七一頁
- (42) 『酒田市史史料篇』（三）六三三頁
- (43) 佐藤七郎「寺島彦助」（『方寸』第十号）
- (44) 『酒田市史史料篇』（四）四五〇頁、『雞肋編』下巻七九一頁
- (45) 中山岩男「東廻り航路の酒田御城米船」（『酒田湊繁盛史』）
- (46) 「酒田丁持関係文書（仮題）」（立川町狩川、長南氏所有文書）
- (47) 尾形誠次『酒田米の経済史的考察』六四頁
- (48) 佐藤七郎「付記」
- (49) 『酒田市史 改訂版』（上巻）巻末付録
- (50) 佐藤七郎「寺島彦助」

- (51) 『酒田市史史料篇』(三) 六四一頁
- (52) 「酒田丁持關係文書(仮題)」
- (53) 「承露盤」 十七抄
- (54) 阿部正己『莊内人名辞典』一八〇頁、藤井康夫「随筆寺島彦助」